

# Vādhūla-Anvākhyāna の伝える潔斎の特徴

## —— VādhAnv IV 4 : 犠牲獣神話の考察 ——

大 島 智 靖

### 1. 序

Soma 祭特有の複合導入儀礼「潔斎 (*dikṣā-*)」の意義解釈は, brāhmaṇa 文献における Agniṣṭoma (Soma 祭の基本形) 冒頭の記述において確立した。潔斎を巡る議論の中に祭主の諸相が示され, 我々は当時の祭官階級が共有していた死生観念の一端を垣間見ることが出来る。Taittirīya 派の一分派, Vādhūla 派が伝える Vādh [ūla]-Anv[ākhyāna] は追補的文献でありヴェーダ時代後期に属すると考えられるが, 他学派と br. 伝承を共有しながら時に独自の見解を示し, 祭式議論の熟成の一過程を知る上で貴重な文献である。VādhAnv の「潔斎」章の構成と議論は Yajurveda 各派の br. に追従せず, 独自性が強い<sup>1)</sup>。紙面の都合上その全ては扱えないが, 本稿では VādhAnv IV 4 の一神話を扱う。この神話は br. の「潔斎」章には平行箇所を見出せないが, 他学派において異なった祭式の文脈の中で採用された神話と一致するものである。それらを考察しつつ Vādhūla 派の思想的背景を探る。

### 2. 犠牲獣の物語

#### 2. 1. 諸神格が居場所を求める

VādhAnv IV 4<sup>2)</sup> *agnir amuṣmin loka āsīd, ādityo 'smin. vāyur apsv āsīd, varuṇo 'ntarikṣe. tā vā etā devatā evam āsan. tāsām itthaṃ kāmā āsīd yathaitarhy. agnir akāmayata "pṛthivyāṃ syām" iti. pṛthivy akāmayatā- "agnir mayi syād" iti. vāyur akāmayatā- "antarikṣe syām" ity. antarikṣam akāmayata "vāyur mayi syād" ity. ādityo 'kāmayata "divi syām" iti. dyaur akāmayatā- "ādityo mayi syād" iti. varuṇo 'kāmayatā- "apsu syām" ity. āpo 'kāmayanta "varuṇo 'smāsu syād" iti. tā abruvan "kayāśiṣā kena tapasā kena yajñenedaṃ vyaśnuvīmahi yathākāmā sma" iti. so 'gnir abravīd "varam vṛṇā. ahaṃ yajño 'sāni. mām ālabhadhvam. mayedaṃ kāmam vyaśnudhvam yathākāmā sthā" -eti. te 'gnim paśuṃ bhūtam agnaye medhāyālabhanta.*

火はあの世界に存在していたが, 太陽はこの[世界]に[存在していた]。風は水たちの中

に存在していたが、Varuṇa は中空に[存在していた]。そういう彼ら神格たちは、このように存在していたのだった。彼らには、その時、次のように願望があった：火は望んだ、「私は大地に存在したい」と。大地は望んだ、「火が私に存在して欲しい」と。風は望んだ、「私は中空に存在したい」と。中空は望んだ、「風が私に存在して欲しい」と。太陽は望んだ、「私は天空に存在したい」と。天空は望んだ、「太陽が私に存在して欲しい」と。Varuṇa は望んだ、「私は水たちの中に存在したい」と。水たちは望んだ、「Varuṇa が我々に存在して欲しい」と。彼らは言った、「どんな祈願によって、どんな苦行によって、どんな祭式によって我々は、ここで、各自到達できるのだろうか、(そうなれば)我々は望み通りだ」と。そこで火は言った、「私は望みを望もう。私は祭式として存在しよう。君たちは、私を捕えて捧げよ、私によって、ここで、願望に到達せよ、(そうすれば)君たちは望み通りだ」と。彼らは犠牲獣となった火を、火[自身]のために、供犠に付する為に捕えて捧げた。

この物語は火と太陽、また風と Varuṇa がその居場所に不満を持ち、交替したがることから始まる。Veda の世界観では、火は大地と、太陽は天と結び付き、風は中空にあり Varuṇa は水と関わるのが常である。各々の本来の居場所を求めて彼らは‘火’を捧げ、供犠を行う。以下、この供犠が次々と新たな供犠を生む。

## 2.2. 供犠の連鎖

(Cont.) *tasyālabdhasya medhas cāsus cāpākramatām*<sup>3)</sup>. *puruṣa eva medho 'bhavat, kimpuruṣo 'sus. taṃ paryapaśyaṃs. te 'bruvann "apa vā asyālabdhasya medhas cāsus cākramiṣṭām. hantāsyā medham ālabhāmahā" iti. te puruṣam ālabhanta. tasyā[labdhasya] medhas cāsus cāpākramatām. aśva eva medho 'bhavad, gauro 'sus. taṃ paryapaśyaṃs. te 'bruvann "apa vā asyālabdhasya medhas cāsus cākramiṣṭām. hantāsyā medham ālabhāmahā" iti. te 'śvam ālabhanta. tasyālabdhasya medhas cāsus cāpākrāmatām. gaur eva medho 'bhavad, gavayo 'sus. taṃ paryapaśyaṃs. te 'bruvann "apa vā asy[ālabdhasya] medhas cāsu[ś cā]kramiṣṭām. hantāsyā medham ālabhāmahā" iti. te gām ālabhanta. tasyālabdhasya medhas cāsus cāpākramatām. avir eva medho 'bhavad, uṣtro 'sus. taṃ paryapaśyaṃs. te 'bruvann "apa vā asyālabdhasya medhas cāsus cākramiṣṭām. hantāsyā medham ālabhāmahā" iti. te 'vim ālabhanta. tasyālabdhasya medhas cāsus cāpākrāmatām. aja eva medho 'bhavac, charabho 'sus. taṃ paryapaśyaṃs. te 'bruvann "apa vā asyālabdhasya medhas cāsus cākramiṣṭām. hantāsyā medham ālabhāmahā" iti. te vṛihiyavāv ālipsanta. tāv apah prāviśātān. tāu matsyau prāgiratām. rohita eva vṛihim prāgirac, caṣo yavam. ulūkhalamusale eva rohitaś śirṣann akuruta, śūrpañ caṣa. iṣṭam hāsyāgnimedhena puruṣamedhenāsvamedhena<sup>4)</sup> gomedhenāvimedhenājamedhena vṛihimedhena yavamedhena bhavati ya evaṃ vidvān aṣṭākapālena yajate, ya u cainam evaṃ veda.*

捧げられたその「髓」と「存在」が歩み去った。「髓」は他ならぬ‘人’になった。「存在」は猿(出来損ない?)<sup>5)</sup>に[なった]。[彼らは]それ(=光景)を見渡した。彼らは言った、「捧げられたこの「髓」と「存在」が歩み去ったぞ。よし、この「髓」を捕えて捧げよう」と。彼らは‘人’を捕えて捧げた。捧げられたその「髓」と「存在」が歩み去った。「髓」は他ならぬ馬になった。「存在」はガウル<sup>6)</sup>に[なった]。[彼らは]そ

れを見渡した。彼らは言った、「捧げられたこの「髓」と「存在」が歩み去ったぞ。よし、この「髓」を捕えて捧げよう」と。彼らは馬を捕えて捧げた。捧げられたその「髓」と「存在」が歩み去った。「髓」は他ならぬ牛になった。「存在」はガヴァヤ<sup>7)</sup>に[なった]。[彼らは]それを見渡した。彼らは言った、「捧げられたこの「髓」と「存在」が歩み去ったぞ。よし、この「髓」を捕えて捧げよう」と。彼らは牛を捕えて捧げた。捧げられたその「髓」と「存在」が歩み去った。「髓」は他ならぬ羊になった。「存在」はラクダに[なった]。[彼らは]それを見渡した。彼らは言った、「捧げられたこの「髓」と「存在」が歩み去ったぞ。よし、この「髓」を捕えて捧げよう」と。彼らは羊を捕えて捧げた。捧げられたその「髓」と「存在」が歩み去った。「髓」は他ならぬ山羊になった。「存在」は鹿<sup>8)</sup>に[なった]。[彼らは]それを見渡した。彼らは言った、「捧げられたこの「髓」と「存在」が歩み去ったぞ。よし、この「髓」を捕えて捧げよう」と。

<sup>9)</sup> 彼らは米・麦を捕えて捧げたがった。そのとき両者は水中<sup>10)</sup>へと入っていった。その両者を、二匹の魚が飲み込んだ。他ならぬローヒタ<sup>11)</sup>が米を飲み込んだ、チャシャ<sup>12)</sup>が麦を[飲み込んだ]。臼と杵を、ローヒタは頭に据えた；箕を、チャシャは[頭に据えた]<sup>13)</sup>。このように知って8皿分[の Agni に対する purodāśa]で祀る<sup>14)</sup>とき、そしてかの[Agni]をこのように知る者、この者によって Agnimedha と Puruṣamedha と Aśvamedha と Gomedha と Avimedha と Ajamedha と Vrihimedha と Yavamedha[の8つの供犠]が祀られたことになる<sup>15)</sup>。

この神話には居場所を取り戻そうとする神格たちが次々に犠牲獣祭を行っていく様子が描かれている。屠った犠牲獣から歩み去った médha は「供犠・祭式」を意味するが、ここでは解体で取り除いた「供犠性」を有する家畜の主要パーツを指すので包括的に「髓」とした(註22参照)。médha が順次姿をとる家畜たちは、古くは Ṛgveda X 90「Puruṣa 賛歌」以来<sup>16)</sup>、br. で随所にその列挙が見られる<sup>17)</sup>。āsu は、特にここでは、いわば死後の「存在」を表しており、médha 性を持たない動物たちに変化している<sup>18)</sup>。ここでは‘火’を含め8種の「犠牲獣」を捧げる。潔斎 iṣṭi (穀物祭)における一要素「Agni に対する8皿分の purodāśa」の意義説明に繋がる神話である。2.2の物語は A[itareya]-B[rāhmaṇa]に平行箇所を見出すことが出来るが、祭式は Paśubandha (犠牲獣祭)である。

### 2.3. 犠牲獣祭における神話

AB II 8 (1) *puruṣam vai devāḥ paśum ālabhanta, tasmād ālabdhān medha udakrāmat. so 'śvam prāviśat, tasmād aśvo medhyo 'bhavad, athainam utkrāntamedham atyārjanta, sa kimpuruṣo 'bhavat.* (2) ... (3) ... (4) *so 'je jyoktamām ivāramata, tasmād eṣa eteṣām paśūnām prayuktatamo yad ajas.* (5) *te 'jam ālabhanta, so 'jād ālabdhād udakrāmat, sa imām prāviśat, tasmād iyam medhyābhavad, athainam utkrāntamedham atyārjanta, sa śarabho 'bhavat.* (6) *ta eta utkrāntamedhā amedhyāḥ paśavas, tasmād eteṣām nāśniyāt.* (7) *tam asyām anvagachan, so*

*'nugato vrīhir abhavat, tad yat paśau puroḍāsam anunirvapanti. "samedhena naḥ paśuneṣṭam asat, kevalena naḥ paśuneṣṭam asat" iti. (8) samedhena hāsya paśuneṣṭam bhavati, kevalena hāsya paśuneṣṭam bhavati ya evaṃ veda.*

(1) 神々は‘人’を犠牲獣として捕えて捧げたのだ。捧げられたそれから供犠に相応しい「髓」が歩み去った。それは馬に入った。それゆえ馬は供犠に相応しくなった。次に「髓」が歩み去ったそれ(人)を運び去った。するとそれは猿(出来損ない)になった<sup>19)</sup>。(2) ... (3) ... (4) その[髓]は山羊の中に丁度最も長い間憩っていた。それゆえ山羊、これがこれらの犠牲獣の中で最もよく繋がれ[犠牲獣に利用される]。(5) 彼らは山羊を捕えて捧げた。捧げられた山羊からそれ(髓)が歩み去った。それはこの[大地]に入った。それゆえこの[大地]は供犠に相応しくなった。次に「髓」が歩み去ったそれ(山羊)を運び去った。するとそれは鹿になった。(6) そのようなこれらの「髓」が去ったものたちは、供犠に相応しくない犠牲獣たちである。それゆえ、これらの[肉]を食べるべきではない。(7) それ(髓)の後を追って、(神々は)この[大地]の中へと赴いた。それ(髓)は[神々に]従われて、米になった。犠牲獣祭において、追って puroḍāsa を準備して捧げること、それについて、「我々によって「髓」を有する犠牲獣が祀られたものとなるがよい。我々によって専用の<sup>20)</sup> 犠牲獣が祀られたことになるがよい」と[考えてのことである]。(8) このように知る者、この者によって「髓」を有する犠牲獣が祀られたことになり、専用の犠牲獣が祀られたことになる。

省略した(2)と(3)では(1)と同様の定型文によって供犠が為され VādhAnv の Ver. と同じ展開だが(5)で米が大地に入り、VādhAnv の「水中」と異なる。祭式上の文脈は paśu-puroḍāsa (犠牲獣祭の解体の後に献供する祭菓)の意義付けである。そして AB のこの神話は iṣṭi の一神話と並行していることが知られている。

#### 2.4. Ś[atapatha]-B[rāhmaṇa]の犠牲獣神話

ŚB I 2, 3, 6-9 (~ŚB[Kāṇva] II 2, 1, 20-22)<sup>21)</sup> では iṣṭi の供物 puroḍāsa が犠牲獣に見立てられる。犠牲獣祭を執行したのと同等の効力を込める為に 2.2 と同様の神話が採用されている。

#### 2.5. 結び

VādhAnv/AB/ŚB の 3 つの Ver. は、各々異なった祭式の中に取り込まれている。AB の Ver. は、動物解体供犠からその直後の paśu-puroḍāsa 献供への接続において祭式の連繫・効力を与える役割を果たしていると考えられ<sup>22)</sup>、実際の儀礼過程に照らして理解できる。ŚB の Ver. は穀物で作った供物(puroḍāsa)が「動物解体供犠」という血腥い行為の効果すら内包することを権威付けているが、ここには iṣṭi[の供物]と Paśubandha[の犠牲獣]の関係(両者が祭式概念上重なり合うことは br. の随所で説かれる)が反映している。では VādhAnv の Ver. は如何なる意図が込められているのだろうか。潔斎 iṣṭi の前に犠牲獣祭が執行されることはないので、

ŚB のように、供物である puroḍāśa の犠牲獣祭の効果を強調したと推測されるが、何故その必要があったのだろうか。ここで Yajurveda の各 br. において「潔斎 iṣṭi」の記述の中に説かれた供物の意義を考慮してみたい。古層の br. 即ち M[aitrāyaṇī] 及び K[āthaka]-S[amhitā] において、潔斎 iṣṭi に用いる puroḍāśa は「供犠の姿」、粥は「人間として捕えられ捧げられる」と明示されたが、一方 T[aittiriya]-S[amhitā] と ŚB ではそういった明言は避けられ示唆に留まった<sup>23)</sup>。VādhAnv は MS/KS が説いた「祭主の犠牲」と供物の関係を古来の神話の枠組みを利用して強調し、自派の主張を際立たせたと考えられる。VādhAnv の独自の構成は、潔斎 iṣṭi を巡る議論が、主な br. で確立された後もその裾野を広げていたことを示唆している。

- 
- 1) Agniṣṭoma の開始 / 潔斎 / 压榨 / 終了時における神格の規定(IV 1)、祭場の規定(IV 2-3)が為される。平行部分は殆ど見出せない。 2) CALAND *Acta Orientalia*, VI (1928) p.116 (= *Kleine Schriften*, p.416), 19a; IKARI 電子 text を主に参照した。 3) 以下、-kra / krā- が混在する。CALAND は -krā- に統一するが、伝承のままとした。 4) CALAND の text には *asvamedhena* が欠落。 5) *kimpuruśā-*: こびと、奇形児、猿人、猿などと従来解釈されるが具体的に特定し難い。 *Altindische Grammatik* II<sub>1</sub>, p.84; 27 (Nachträge). Vājasaneyi-Saṃhitā XXX 16 (~Kāṇva XXXIV 3,3); ŚB I 2,3,9; VII 5,2,32. 6) *gaurá-*: Bos gaurus: 通称ガウル (Gaur), インドヤギウ。 7) Bos gavaeus. 8) *śarabhá-*: 鹿か羚羊の一種か。HOFFMANN *Aufsätze zur Indoiranistik*, p.10, n.10 では鹿を想定。また KRICK *Das Ritual der Feuergründung* 1982, p.71 では鹿、或いは直翅類を疑っているが昆虫は想定し難い。 9) 「山羊を捕えて捧げた」が省略されている。「髓」から米・麦への変異は言明されない。 10) AB/ŚB の Ver. と異なる展開だが TS II 6,1,1: Agni と matsya の小話に若干共通する部分がある。 11) 魚の一種である rōhita は法典類や MBh 等に登場する。 12) *caśa-*: *jhaśá-* (巨大魚; ŚB I 8,1,4) もしくは *jaśá-* (海獣?) との関連が考えられる。MYRHOFER *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* I, p.608. 13) ulūkhālamusala と sūrpa は穀物祭における脱穀作業で使用する。 14) 8 皿分の Agni に対する puroḍāśa は、潔斎 iṣṭi には実際に用いられない。VādhAnv は 8 皿分の puroḍāśa には yaj のみで *nir-vap* を使用せず、後の IV 7 にて Viṣṇu に対する 3 皿分の puroḍāśa を追加し、最終的に他学派と同様 Agni と Viṣṇu に対する 11 皿分の puroḍāśa を献供する (*nir-vap*)。Agni に対する 8 皿分の puroḍāśa は、祭式における基本的な要素である。VādhAnv IV 5 (この文 CALAND と CHAUBEY の text では欠落): *sā ha vā eṣā gaur eva devī yad aṣṭākapāla, etasyām hi sarve yajñās*. 「8 皿であるとき、これは他ならぬ女神としての牛なのだ。全ての祭式はこの中に[ある]から。」 15) この後、神格たちは水中を探索して 2 匹の魚を捕獲するが、米・麦は自らの繁殖即ち耕作という条件を出す。彼らは各自 1 皿分の puroḍāśa (計 8 皿分) を持ち寄って居場所を取り戻す。 16) 後藤敏文「巨人の解体」『インドの夢・インドの愛』(上村・宮元編), 春秋社 1994, p.33 参照。 17) Agni から人 / 馬 / 牛 / 羊 / 山羊 / 麦 / 米 (*saptā grāmyāḥ paśavāḥ*) が放出

(270)

## Vādhūla-Anvākhyāna の伝える潔斎の特徴 (大 島)

される：MS I 8,1 [Agnihotra] ~ KS VI 2 ~ Taittirīya Brāhmaṇa II 1,2,4-6 (人 / 馬 / 牛 / 羊 / 山羊). Cf. Bodewitz *The daily evening and morning offering (Agnihotra) according to the Brāhmaṇas* 1976, p.30ff. (人) / 牛 / 馬 / 山羊 / 羊 / 米 / 麦の列挙：Jaiminiya-Brāhmaṇa I 252；II 34；403. 人 / 馬 / 牛 / 羊 / 山羊の犠牲：ŚB VI 2,1,2 [Agnicayana]；TB III 9,8,1 [Aśvamedha].

18) Cf. Baudhāyana-Ś[rauta]-S[ūtra] II 5；ŚāṅkhāyanaŚS XVI 3,14 (~XVI 12,13).

19) 省略。(1)と同じ定型文で牛・羊・山羊 / ガウル・ガヴァヤ・ラクダが現れる。

20) つまり médha な犠牲獣を指す。21) 語りの時制が perfect 中心になり構成に若干の差異がある他は AB の Ver. と同内容である。22) puroḍāśa 自体が犠牲獣であるということにも正当性が与えられ、puroḍāśa の原料である米・麦が「髓」の代わりになる。AB II 9,1-3：sa vā eṣa paśur evālabhyate yat puroḍāśas. tasya yāni kiṃśārūṇi tāni romāṇi. ye tuṣāḥ sāvrag. ye phalikaraṇās tad asṛg. yat piṣṭam kiknasās tan mānsam. yat kiṃcit kamsāram tad asthi. sarveṣām vā eṣa paśūnām medhena yajate yaḥ puroḍāśena yajate. 「puroḍāśa であるとき、これは他ならぬ犠牲獣として捕えられ捧げられるのだ。その芒たち、それらは体毛たちである。糲殻たち、それは皮膚である。脱穀・除去作業たち、それは血である。搗かれて粉になったものや挽き割り粉たち、それは肉である。何であれ固い[木製品]、それは骨である。puroḍāśa によって祀る者は、全ての犠牲獣たちの「髓」によって祀るのだ。神話の「髓」が歩み去った」とは、解体によって犠牲獣が主要な部分を失ったことを反映したものであろう。AB II 11,10：tad āhur “yad eṣa havir eva yat paśur athāśya bahv apaiti, lomāni tvag asṛk kuṣṭhikāḥ śaphā viṣāṇe. skandati piṣitam. kenāśya tad āpūryata” iti. 「それについて(人々は)言う、『犠牲獣、これが他ならぬ供物であるとき、さてこれの多く[の部位]が去る、体毛たち、皮膚、血液、蹴爪たち、蹄たち、両角が、切り取られたものが飛び出る。この[獣の]それは何よって満たされるのか』と」；12：paśubhyo vai medhā udakrāmaṅs. tau vrīhiś caiva yavaś ca bhūtav ajāyetām. 「犠牲獣たちから médha たちが歩み出たのだ。それらは他ならぬ米と麦とになって誕生したのだ」23) 以上は筆者が「dikṣaṇīyeṣṭi と祭主の「犠牲」」『印仏研』55-1(2006)pp.313-310にて扱った。

〈キーワード〉 Veda, Agniṣṭoma, dikṣā, paśu, Vādhūla, 潔斎, 犠牲

(京都大学人文科学研究所非常勤講師)